

フランスのバカロレア試験から見た日本人の 思考力不足についての考察

A Study of Japanese Lack of Thinking Ability from the French Baccalaureate Examination

渡辺 パコ WATANABE Paco

デジタルハリウッド大学 教授
Digital Hollywood University, Professor

フランスの高等学校の共通卒業試験にあたるバカロレアは、大学への入学資格試験も兼ねていることから、日本の大学入学共通テストにも比せられる。筆者はフランスのバカロレア問題（哲学）を日本のビジネスパーソンとともに解答を試みた。その結果わかったことは、バカロレアに出題される抽象度の高い課題に対してまったく歯が立たない思考力しか持っていないという事実だった。本稿では日本の大学卒業者が身につけられていない思考力とはどのようなものかを明らかにしつつ、そのことがこれからの社会の重要な構成員として役割を果たすために、どのような悪影響があるのかについて考察する。

キーワード：フランス、バカロレア、哲学、思考力、社会課題

1. はじめに

1.1 フランスのバカロレア試験

フランスのバカロレア試験は1808年にナポレオン・ボナパルトによって始められ、フランス国家が重要視する自由と民主主義を実現するための担い手を育成する目的で始められた。フランスの学校教育の中でもフランス語（国語）の教育は、高校教育終了時点でディセルタシオン（dissertation）と呼ばれる形式で自らの主張を表現できるようにすることを目標に組み立てられ、その仕上げとしてバカロレア試験が行われる。フランスのバカロレア試験では文系・理系など将来の専攻にかかわらず哲学が必須であることもこの目的と連動している^[1]。

本稿では、特にことわりがない限り、フランスのバカロレア試験の中でも哲学の試験をバカロレアと記述し、国際バカロレアについては触れない。また2021年からフランスはバカロレアを大きく改革し、哲学の比重が下げられたとも見られているが、一方で出題形式や問いはほとんど変わっていないことから、フランス国家がディセルタシオンと呼ばれる思考方法を身につけることを重視しなくなったとは言えないことを前提に論を進める。

1.2 論考の方法

本稿では、まず(1)ディセルタシオンと呼ばれる論文形式を参照した上で、(2)実際のバカロレアで出題された問いをこの形式にした場合のアプローチの方法を示し、(3)日本の大卒者にそのアプローチが困難な理由を考察する。そのうち(4)ディセルタシオン式の思考法を修得していないことが、これからの日本の社会にどのような影響をもたらすかを検討する。

2. ディセルタシオンの思考形式

2.1 ディセルタシオンは主張のための型

ディセルタシオンは論文という意味のフランス語だが、必ずしも学術論文を意味せず、広く主張を考え、伝えるための思考様式をさす。具体的には以下のような形式をとる^[2]。

(1) 導入

主題に対する3つの視点と全体図

(2) 展開部（弁証法）

(2-1) 定立：正＝テーゼ

(2-2) 反立：反＝アンチテーゼ

(2-3) 統合：合＝サンテーゼ

(3) 結論

問題点の整理と残された課題

一般的に弁証法と呼ばれる論理展開が基本になっているのがわかるが、日本では弁証法というとヘーゲルやマルクスのそれが真っ先に思い浮かび、それと同じだと考えるとやや理解しにくい。どちらかという、デカルト以来的方法的懐疑であると考えた方がよいが、ここでは哲学史上における弁証法の意味や違いを論じることが目的ではない。

日本の高等教育を受けた者から見たときに、このような論理展開によって主張を考えるという方法そのものがほとんどなじみがない点に注目したい。

実際、筆者が主催する社会人向けの哲学の勉強会「ばこ哲」の受講者とともにバカロレアの問題に取り組むと、そもそもどのようなアプローチで課題に迫ったらいいのか、それ自体がわからず、思考が前に進まない。

前述の通り、フランスの学校教育では、小学校からフランス語（国語）教育を通じてこのような方法で課題にアプローチする方法を細分化して、学年を追うごとに部分を分け、難易度を上げながら理解させている。フランスの高校生がいきなりこのような考え方ができるわけではなく、ディセルタシオンの方法で考えることを積み上げる方式で学んでいるので、バカロレアで出題された問いにどのように考えていけばいいのかがわかるのだ。大学入学レベルの学力がある者なら、全員がこのような方法で考えることができるように教育されているのである。

2.2 ディセルタシオンは市民がともに考えるための道具

後述するが、バカロレアの出題は短文で抽象度の高い質問である。日本人から見ると禅問答のようにも見え、そもそも論理的に考える対象とは理解できず、ある結論は想定できてもその根拠が示せるとは到底思えない。

このような、日本の高等教育を受けた者が考えあぐねてしまうような課題に、屹立する岩壁に取りついて山頂をめざすように論理展開の道筋を見だし、どのように岩壁を登ればいいのかを、フランスの若者たちは教育を受けているのである。そしてそれが公教育という形でだれもが身につけられるように社会的に用意されている。フランスで大学を出ている大人たちならだれでも岩壁のように見える課題に取りつき、登る方法がわかっているという共通認識と共通能力があるということだ。そして岩壁を目の前にいる誰かと手を組むことでうまく登れるはずだという認識と自信を持っていることになる。

これに対して同じ問題を前にして日本の大人たちはただ立ち尽くしてしまい、はなから登れないものと考えて引き返してしまう。

ディセルタションという教育の成果は、単に個人の能力開発ではなく、社会の基盤として抽象度の高い課題にもだれもが立ち向かえるという自信を提供している。

3. バカロレア出題へのアプローチ

ここで2019年に理系志望者に出題された課題のひとつを例に挙げて、思考のアプローチを見てみよう。

出題：文化の多様性は人類の統合の障害になるか？

(La pluralité des cultures fait-elle obstacle à l'unité du genre humain ?)

3.1 全体図と論点

この出題を受講者に考えてもらおうと、受講者は結論を急いでしまい、Yes or Noから考え、自分の直観に合う方を選んで、その理由を考え始める。しかし前述の通り、ディセルタションの手順ではまず出題の全体像を把握し、主要な論点を3つ程度に絞るというプロセスをとらなければならない。このような手順を思いつける受講者はまず皆無である。逆に言えば、フランスの大学生たちは先に全体像を把握しようという習慣が身につけていて、数名で考えるときにも迷わずにそこから議論しようとする。

この出題の場合、どのような全体像になるか、その一例を挙げてみよう。

一般に文化の多様性をどのような視点から考えればいいのか？ここではまず発見すべき視点として、信仰する宗教の多様性という点が重要度が高い。人類全体を見回せば多様な文化の多くが宗教の教えや習慣と結びついている。特殊な例を挙げるのではなく最も代表的な視点は何かというアプローチが習慣づいていれば、宗教抜きに文化の多様性を語ることはできないことに必然的に気付くことになる。

日本では文化と宗教を結びつける視点が乏しいが、だからといって日本の文化が仏教や神道と無関係に存在してはいない。文化のような抽象度の高いものについて考える訓練が乏しいため、全体像を考えようとしても、全体像の視点を見つけることができないのだ。

この出題について、全体像を見るために見だしておきたい視点としては、食文化、着衣、住環境なども挙げられる。文化の多様性を論じる視点を発見すると同時に、その重要度を判断することが最初のポイントとなる。

同様に出題後段の「人類統合の障害」という記述に対しても、取り上げるべき視点を検討する。組み合わせると、「宗教が違うことは人類が統合されず、バラバラになることを必ず助長してしまうのか？」といった論点を出すことが、最初のアプローチとしては重要だ。

3.2 弁証法

次に、発見した論点について、弁証法で論理展開を行う。

たとえば前述の「宗教が違うことは人類が統合されず、バラバラ

になることを必ず助長してしまうのか？」という論点について、まずテーズ(正)として、「助長する」という主張を行う。その際、自分の経験や直観ではなく、過去の哲学者など、学問的にオーソライズされた主張を引用することが基本になるが、現代の分析哲学の手法を使い、関連する社会事例とそれについての社会からの反応を論拠にする方法もある。

その後、アンチテーズ(反)として、「助長しない」という論理展開をしめす。

これができる条件として、論点にあわせて正と反の両面からどのような主張ができるか(過去にあったのか)の知識を持っている必要がある。これについてもフランスでは小学校以来の学校教育の中でさまざまな主張について国語で学び、準備ができていることが背景にある。この点にも日本との大きな差が見られるだろう。

さらに正と反の主張をあわせて検討し、サンテーズ(合)として、自分なりの論理展開を行い、Yes/Noを主張することになる。この場合も、単に自分の考えを言うのではなく、両者のどちらが、どのように有力で説得力があるかを、過去の哲学者の主張や現実の事例を適切に使って論理展開する必要がある。

たとえば、「表面的に見ると宗教の違いで対立が起き、人類の統合ができなくなると考えられるが、異なる宗教がいつも対立してきたわけではなく、多くの宗教には異教徒に対する融和的態度を重視する教えがある、よって対立が起きて統合できないというのは対立を望む人々によるバイアスを含んでいる」というような論理展開が考えられる(実際には主張に必要な引用や事例を含めて説明する)。

4. 社会課題への展望力の差

4.1 価値の相対化への抵抗力

前節で取り上げた「文化の多様性は人類の統合の障害になるか？」という出題は、欧州にとつての重大関心事である移民問題を念頭に置いた出題であると考えられる。中東からの移民が増え、フランスに限らず欧州各地でイスラム教徒を始め異宗教、異文化の住民が増えているが、融和的に生活できなければ、社会基盤が揺らぐ。直観的な判断に従えば、異教徒や異文化を排除する動きが加速し、統合が失われる可能性がある。もちろんバカロレアとしては、統合は可能という主張が正解で、統合は不可能という回答が不正解として論じるべきであるというようには出題されていない。結論自体はどちらも認めつつ、受験生を評価するポイントはこのような抽象度が高く、直観による答えが誤りを含みやすい問題に対して、論理的に解答を導けるかどうかという点で受験生の能力を評価している。バカロレアを通じて多くの社会人(フランスではバカロレアに合格して大学以上に進むのは人口の60%程度)が抽象度の高い問いに対する答えの出し方を知っているということに大きな意味がある。

フランスがバカロレアを重視する理由は、答えに至ることが困難に見える問題(高山の岩壁に例えられる)にも、解答の方法があるという可能性への信頼を社会構成員の間で共有したいからだと言ってよいだろう。フランス社会はそびえる岩壁のような困難な社会課題を前に、それでも登頂ルートがあるに違いないと確信する人々を多く育てようとしている。

対する日本は、そもそもこういった抽象度の高い課題に向き合う機会に乏しく、向き合う場合も結論に向かって合理的に答えを出すことを練習する機会が非常に少ない。その結果、日本人は「難しい問題だから答えは出ない」と登頂ルートを求める姿勢を早々に放棄してしまう。

険しい岩壁を前にして、複数の登頂ルートの中でどれを選ぶべきかを議論できるフランスに対して、日本では岩壁を前にしてルートがあると見えるだけの思考力がある人が少なく、岩壁を前に退却してきた者同士が登頂は無理だと言い合っているような状況と言える。

4.2 国民性ではなく教育

以上の論考から、フランスでは抽象度が高く結論が分かれやすい問題について、向き合い、合意をめざす方法が社会実装され（社会実装することにこだわり）、困難であっても結論（合意）に至れるという理性への信頼を形成している。そしてこの状況がフランス人の長い伝統や固有の性質ではなく、19世紀初頭からの200年あまりの教育の成果であり、彼らがつくり上げ、大切にしてきた結果であることに注目したい。

他方、日本人が抽象度の高いテーマについて考えることができないのは、方法を学んでいないこと、社会実装されていないことが理由であって、日本人が古くから持つ変えがたい国民性ではない。

日本人は議論がへたで、議論するより和をだいじにするのだという説明があるとしても、それは議論をするための素地をつくる努力を怠ってきたことのいいわけに過ぎない。

フランスに限らず、欧州ではこういった抽象度の高い問題を合理的に考える努力を積み重ねてきた。そのことが欧州が人権や環境問題などさまざまな社会課題に対して、主導的な地位を保つ理由である。そしてその地位に立つことを日本には不可能と考える理由はない。

参考文献

- [1] 渡邊雅子:『フランスの思考表現スタイルと政治的教養の育成』
『教育学研究』第84巻第2号(2017年), 52-63頁
- [2] 中島さおり:『哲学する子どもたち: バカロレアの国フランスの教育事情』河出書房新社(2016年)